

寝衣交換技術の演示時の指導言語にオノマトペを用いた効果

大津 廣子, 中村 美起, 林 暁子, 三井 弘子, 中井 三智子

鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科

原著論文

寝衣交換技術の演示時の指導言語にオノマトペを用いた効果

大津 廣子, 中村 美起, 林 暁子, 三井 弘子, 中井 三智子

鈴鹿医療科学大学 看護学部 看護学科

キーワード： 寝衣交換技術, 演示, 指導言語, オノマトペ

要 旨

【目的】寝衣交換技術の修得を高めるために、教員の演示時の指導言語にオノマトペ（擬音語、擬態語）を用いた有効性を明らかにする。

【方法】1) 対象：寝衣交換技術の授業を履修していない A 看護系大学 1 年生 30 名
2) 方法：研究参加の同意が得られた 30 名の学生を、演示時の説明にオノマトペを用いた群（実験群）とオノマトペを用いない群（対照群）に分けた。事前に両群に対し寝衣交換技術の技術チェックを実施し、両群に有意差がないことを確認した後、教員がそれぞれの群に対して寝衣交換技術の演示をみせた。その後両群ごとに一人 15 分間の技術練習を 2 週間実施した後、寝衣交換技術の技術チェックを行った。事前・事後の技術チェックとも 3 人の同じ評価者が、技術チェック表を用い評価した。分析：寝衣交換技術の修得度（1：まったくできていない～4：できている）を得点化し t 検定にて 2 群を比較した。

【結果】事後調査の総得点は実験群 87.1、対照群 76.5 で両群の修得度に有意差 ($p < 0.01$) がみられた。25 項目中「寝衣を無理なく丁寧に脱がす」「新しい寝衣を無理なく丁寧に着せる」など 13 項目において、オノマトペを用いた指導言語を使用した実験群の修得度が有意 ($P < 0.01$, $p < 0.05$) に高かった。

【考察】オノマトペは、感覚的な印象を表し、複雑な内容や微妙なニュアンスも自由に表現でき、動作表現の機能があることより、「手関節を下から支える」という説明よりも「手関節を下からフワリと支える」という指導言語の方が、支え方の動作をやわらかいイメージとして連想することができ、学生は丁寧な動作ができるように修得できたと考えられる。演示時に視覚的情報を補完する指導言語として、オノマトペを用いた指導言語の教示は有効であることが示唆された。

1. はじめに

看護基礎教育における看護技術の指導方法は、学内演習という授業形態により展開されていることが多い。看護技術の学内演習とは、講義で学んだ看護技術の学習内容を学内で模倣的・総合的に体験、経験、練習させる方法であり、学習者の主体的活動が期待される教授法である。このような学内演習では、学習者に看護技術の動作を見せるために、教員が演示（デモンストレーション）をして指導する方法がよく用いられている。

学内演習で実施している技術項目をみると、看護専門学校や看護系大学の9割以上の教員は、「清拭」「車椅子の移乗と移送」「寝衣交換」技術は実施しており、その指導方法に教員の演示を用いている¹⁾。しかし、看護技術を指導する多くの教員は自分の教え方に対して、表現力は不十分であり、演示時の解説は得意でないという意識を持っている²⁾。このことは、看護技術の指導において、多くの教員が演示を用いて指導しているにも拘らず、演示の効果が充分でないといえる。

一般的に技術や伝統芸能の修得は、模倣から始まると言われている³⁾。看護技術教育においても、技術習得の第一段階は教員から示された動作を学習者は観察し、知識を想起させながら行動するという模倣から始まる。そして、反復練習を繰り返し、意識することなく自然にそのことが適切にできるようになる自動化の段階へと到達するのである。それゆえ看護技術教育においては、教員が自らの行動により学習者の理解を促進させる方法である演示は、重要な意義がある。教員による演示は、視覚的指導であり学習者の学習意欲を刺激するが、黙って動作を見せるのみでは効果は少なく、指導内容を容易に伝達することのできる言語的指導（以下、指導言語という）を用いてこそ、効果的な演示といえる。

指導言語は、教員と学習者間に行われる相互作用であり⁴⁾、看護技術の演示や指導をより効果的にするためには、指導する技術や学習者の特性を考慮した指導言語を使用し、学習者が動作のイメージを鮮明に描くことができる言語表現を用いることが重要となる。そのような動きとイメージを結びつける言葉としてオノマトペが使用されることが多い⁵⁾。オノマトペとは、擬音語（または擬声語）・擬態

語などの総称であり、擬音語は「カツン」「カチッ」「コンコン」などのように実際の音を模倣し表した言葉であり、擬態語は音そのものではなく「ガチガチ」「ガンガン」「フワフワ」などのように目に見えた動きや状態を表した言葉である⁶⁾。オノマトペの研究としては、運動の「コツ」を表現する言葉⁷⁾や動きの言語化を引き出す指導法⁸⁾など動作とオノマトペに関する効果的な報告⁹⁻¹¹⁾が多くみられる。しかし、医療や看護領域では小児医療場面における看護師と幼児とのコミュニケーション^{12,13)}や患者と医師の診療場面におけるオノマトペの効果的運用¹⁴⁾の報告はみられるが、看護技術の学内演習にオノマトペを使用しその効果に焦点をあてた報告は見当たらない。

そこで今回、寝衣交換技術の修得を高めるために、教員の演示時の指導言語にオノマトペを使用し、その効果について明らかにすることを目的に本研究に取り組んだ。

2. 研究目的

寝衣交換技術の修得を高めるために、教員の演示時の指導言語にオノマトペを用いた有効性を明らかにする。

3. 用語の定義

看護技術の演示：基礎看護技術の学内演習で、教員が視覚的指導を目的として、技術を学生に見せるために実演して示すことをさす。

指導言語：教員が指導する際に指導したい内容を容易に伝達することができる言葉をさす。

4. 方法

1) 研究デザイン

準実験研究

2) 研究対象

寝衣交換技術の授業を履修していない A 看護大学 1

年生 30 名を対象とした。

3) データ収集期間

平成 28 年 9 月～平成 28 年 11 月。

4) データ収集

寝衣交換技術の授業を受けていない 1 年生の学生に対し、研究目的、研究方法、研究協力者の条件（1 週間に 2 回の寝衣交換技術の自己練習を 2 週間実施することが可能な学生）、協力していただく内容等を記載した用紙を掲示し、研究協力者を募集した。応募してきた学生に対して、改めて研究目的、研究方法、研究協力者の条件などを口頭で説明し、同意が得られた 30 名の学生をくじ引きにより、実験群（オノマトペを取り入れた指導言語を使用）15 名、対照群（オノマトペを取り入れない指導言語を使用）15 名のグループに無作為に分けた。なお、研究対象者の人数は、学内演習の現状に基づき、教員が看護技術を実施する演習ベッドを学生が取り囲み、実演している教員の動作を細部まで観察できる人数を考慮し実験群 15 名、対照群 15 名とした。

寝衣交換の演習実施前に、両群に対して「臥床患者への寝衣交換」技術の修得度について「寝衣交換技術の評価表」を用いた観察法による調査を実施した。評価表と VTR 撮影によるデータを用いて、両群の得点に有意差がみられないことを確認した後、両群合同で寝衣交換に関する授業を 30 分実施した。

その後、両群別々に、同じ教員が「臥床患者の寝衣交換」技術の演習を同じように 30 分実施した。演習の際の説明は、実験群の学生に対しては、オノマトペを使用した指導言語で説明を行い、対照群の学生に対しては、オノマトペを使用しない指導言語で説明を行った。つまり、両群の演習は同じ教員が同じように実施して学生に見せたが、視覚的情報を補完する説明に用いる指導言語は異なるという条件とした。そして、教員の演習を見た直後に、グループで寝衣交換技術の練習を 30 分間実施し、学生が出来ない動作を教員が指導した。その際、

演習時に使用した指導言語を用いながら指導した。その後の学生同士の自己練習では、教員の指導はなく、学生たちの都合のよい時間に週 2 回一人 15 分間の練習を 2 週間実施した。自己練習では、両群の練習場所は別にし、両群が情報交換しないように注意した。

自己練習終了後、両群に対して「臥床患者への寝衣交換」技術の修得度について「寝衣交換技術の評価表」を用いた観察法による調査を実施した。「寝衣交換技術の評価表」は寝衣交換技術の手順をもとに研究者らが作成し、修得度を 4 段階スケール（4：できている～1：まったくできていない）を使用し評価した。評価については、評価表を用いて予備調査を実施し、3 人の評価者の一致度を確認した。事前・事後調査は、学生一人ずつ実施し、3 人の評価者が同時に評価するとともに、VTR 撮影を行った。また、和式寝間着を着た模擬患者（SP）をベッドに臥床させた模擬病室を設定し実施した。模擬患者は事前・事後調査とも同一人物とした。

5) 指導言語の作成

教員の寝衣交換技術の演習を見る学生の視覚的情報を補完する指導言語について、寝衣交換技術の手順にそって検討した。

対照群に用いる指導言語は、先に実施した研究¹⁵⁾で得られたデータから、寝衣交換の演習時に教員が実際に用いていた言葉を抽出し精選した。作成した指導言語は、看護技術教育の専門家によりスーパーバイズを受け、メンバーチェックを繰り返し実施し、内容妥当性の確保に努めた。

実験群に用いる指導言語は、先に作成した対照群の指導言語に対応させ、寝衣交換を行う時の力の入れ方や使われ方、動作の程度やリズム、タイミング、方法などについて、学生がイメージし易く技術の定着に役立つ言い回しを、日本語オノマトペ事典¹⁶⁾を参考に抽出し、オノマトペを取り入れた指導言語を作成した。

たとえば、「寝衣の襟元を広げる」という指導では、学生はどの程度広げればよいかイメージできないと考えて、程度がわずかであるようすがイメージできるように「寝

衣の襟元はチョップリ広げる」言い回しを用いた。また、「背部の寝衣のしわを伸ばす」という指導では、伸ばし方の程度がイメージできなく寝衣のしわが取れない着せ方をしている学生が多いことから、勢いよく、まっすぐにはりつめているさまをあらわす「ぴーん」というオノマトペを使用し「背中しわくちゅになっている寝間着をピーンと伸ばします」という指導言語にした。

寝間着を着せる場合に、袖口から腕を通す説明を「患者の肘と前腕を自分の手のひらで下から支えて、寝間着の袖口を通します」という説明では、学生は手のひらで肘や前腕を掴んで支えることが多い。このような動作では、患者の安楽を意識した丁寧な動作ではないと考え、ゆるやかなさま、弾力のあるさまを表すオノマトペである「ふんわり」というオノマトペを使用し、「患者の肘と前腕を自分の手のひらで下からふんわりと支えて、寝間着の袖口を通します」という指導言語にした（表1）。

6) 分析方法

「寝衣交換技術の評価表」の結果をもとに「できている」を4点、「だいたいできている」を3点、「あまりできていない」を2点、「まったくできていない」を1点として得点化し、3人の評価者の得点をデータとして、t検定にて両群の修得度を比較した。

統計解析にはSPSS Statistics24を用い、有意水準は5%とした。

7) 倫理的配慮

研究参加の意思を表明した対象者に対し、本研究の目的・方法、研究への参加は自由であり、研究途中で協力を拒否する場合においても不利益は被らないこと、参加の有無は成績には影響しないこと、得られたデータは研究目的以外に用いることはなく、個人が特定されないように管理し、匿名化を保持すること、研究成果の公表の際にも個人が特定されることはないなどを依頼文書を用いて口頭で説明した。ビデオカメラの録画映像は、看護技術評価を正確にするための確認用として、研究者が使

用するために、寝衣交換技術を実施している時の身体全体の動きを撮影することを口頭で説明した。そして、個人が特定されないように録画映像は匿名化し、セキュリティ機能のついたUSBメモリーに保存し、個人情報管理者に管理を依頼することを説明した後、同意書への署名をもって研究参加への同意とみなした。

なお、本研究は鈴鹿医療科学大学臨床研究倫理審査委員会の承認（承認番号：252）を得て実施した。

5. 結果

1) 対象者の概要

30名の性別は女性25名、男性5名であった。全員、寝衣交換技術を本研究前に実施した経験はなかった。教員の演示と3回の技術練習に参加した対象者は、実験群15名（女性11名、男性4名）と対照群12名（女性11名、男性1名）であり、計27名を分析対象とした。

2) 寝衣交換技術の修得度と指導言語の比較

「寝衣交換技術の評価表」を用いた3人の評価者の一貫度は、事前調査（ICC:0.85）、事後調査（ICC:0.87）であった。演示後に実施した事後調査の25項目の総得点は、実験群87.1、対照群76.5で両群の寝衣交換技術の得点に有意差（ $p<0.01$ ）がみられ、指導言語にオノマトペを用いた実験群の方が寝衣交換技術の修得度は高かった（表2）。

25項目中、最も得点が高かった項目は、両群とも「2.自分の膝関節がベッドのフレームにつく程度にベッドを挙げた」項目であり、この行為は全員ができており、オノマトペの使用の有無による差はみられなかった。

両群の寝衣交換技術の得点に有意差がみられた項目は14項目であり、指導言語にオノマトペを用いた項目では、13項目に有意差がみられた。特に対照群と実験群の得点差が0.8以上と大きく、実験群の得点が有意（ $p<0.000$ ）に高かった項目は6項目みられた。最も得点差が大きい項目は、「5.・・・手前側にある新しい寝衣

表1 対照群と実験群の演習時の指導言語

対照群の指導言語	実験群の指導言語
1.声掛けは、患者に信頼されるように話します。わかり易いことばで説明します。	1.声掛けは、 おどおど とした態度ではなく、患者に信頼されるように話します。口の中で ごによごによ とか、 こそこそ するのではなく、わかり易いことばで説明します。
2.作業しやすいように、自分の身長や、前腕、上腕の長さ(最大作業域、正常作業域)を考えてベッドを上げます。	2.自分の動きが ヨタヨタ したり チョコチョコ したりしないように、身長や、前腕、上腕の長さ(最大作業域、正常作業域)を考えてベッドのフレームに自分の膝関節が付く程度にベッドを上げます。
3.新しい寝衣がとりやすいように寝間着を準備します。	3.自分の体が スツ と動き、すんなりと新しい寝衣がとれるように寝間着を準備します。
4.自分から遠い方の患者の襟元に手を入れて、襟元を広げてから、自分に近い方の襟元を患者の肩より下げます。そして、患者の肘と前腕を自分の手のひらにのせて、寝間着の袖口を通し脱がせます。	4.自分から遠い方の患者の襟元に手を入れて、 チョップリ 広げてから、自分に近い方の襟元を患者の肩より スルリ と下げます。そして、患者の肘と前腕を自分の手のひらに ソツ とのせて、寝間着の袖口を スーツ と通し脱がせます。
5.次は、新しい寝間着を着せる動作です。自分に近い患者の手首や前腕を自分の手のひらにのせて、新しい寝間着の袖口から入れて、新しい寝間着を着せます。	5.次は、新しい寝間着を着せる動作です。自分に近い患者の手首や前腕を自分の手のひらに ソツ とのせて、新しい寝間着の袖口から スーツ と入れて、新しい寝間着を着せます。
6.横になった時に上になる腕が上にくるように、患者の胸の上で患者の腕を交差させます。	6.横になった時に上になる腕が上にくるように、患者の胸の上で患者の腕を しっかり と交差させます。
7.次は、患者の両膝を立てる動作です。自分の右足を前に出し、肩幅に開き、ベッドに対して対角線上に立ちます。患者の両方の膝の上に自分の親指を当てて、残りの指を膝の裏側に置くように患者の膝をつかみます。そして、そのまま、自分の体重を前足にかけ、患者の両足が軽く上がるように、自分の体重を後ろ足にかけます。	7.次は、患者の両膝を立てる動作です。自分の右足を前に出し、肩幅に開き、ベッドに対して対角線上に立ちます。患者の両方の膝の上に自分の親指を当てて、残りの指を膝の裏側に置くように患者の膝を ソツ とつかみます。そして、そのまま、自分の体重を前足にかけ、患者の両足が ポン と軽く上がるように、自分の体重を後ろ足にかけます。
8.次は、患者を横に向ける動作です。患者の両膝に自分の手のひらを置き向こう側に倒します。両膝が倒れると、患者の上半身が上がってきますので、上がってくる患者の上半身の肩を支え、向こう側に倒します。	8.次は、患者を横に向ける動作です。患者の両膝に自分の手のひらを置き ザツ と向こう側に倒します。両膝が倒れると、患者の上半身が上がってきますので、 王サ王サ しないで、上がってくる患者の上半身の肩を支え、 ゆっくり と向こう側に倒します。
9.横向きになった患者の背部で新しい寝衣を手際よく広げます。	9.横向きになった患者の背中を支えて、新しい寝間着を、両手で ザツ と広げます。
10.次は古い寝間着を取り除く動作です。古い寝間着には汚れがあるから、その汚れがシーツの上に落ちたりしないよう内側に丸めます。	10.次は古い寝間着を取り除く動作です。古い寝間着には汚れがあるから、その汚れがシーツの上に落ちたりしないよう ざっざつ と内側に丸めます。
11.内側に丸めた古い方の寝間着を横になっている患者の下に入れます。入れる時には、丸めた寝間着を丁寧に入れます。	11.内側に丸めた古い方の寝間着を横になっている患者の下に ソツ と入れます。入れる時には、丸めた寝間着を クシャクシャ にしないように丁寧に入れます。
12.新しい寝間着の中心を患者の背骨に沿わせて寝間着を伸ばします。	12.新しい寝間着の中心を患者の背骨に ソツ と沿わせて、背中で わくちや になっている寝間着を ピン と伸ばします。
13.新しい寝間着を扇子のように折るか丸めて、横になっている患者の下に入れます。入れる時には、丸めた寝間着を丁寧に入れます。	13.新しい寝間着を扇子のように折るか丸めて、横になっている患者の下に ソツ と入れます。入れる時には、丸めた寝間着を グジャグジャ にしないように丁寧に入れます。 ぎゅっぎゅっ と入れてはいけません。
14.古い寝間着には汚れがあるから、その汚れがシーツの上に落ちたりしないよう内側に丸めて、取り除きます。	14.古い寝間着には汚れがあるから、その汚れがシーツの上に落ちたりしないよう ざっざつ と内側に丸めて、 ザツ と取り除きます。
15.患者の下に入れてある新しい寝間着を引き出します。引っ張らないように取り出します。	15.患者の下に入れてある新しい寝間着を ススツ と引き出します。 ぎゅっぎゅっ と引っ張らないように取り出します。
16.新しい寝間着の袖口に自分の手を入れて、患者の肘と前腕を自分の手のひらで下支えて、寝間着の袖口を通し着せます。	16.新しい寝間着の袖口に自分の手を入れて、患者の肘と前腕を自分の手のひらで下から ふんわり と支えて、寝間着の袖口を スツ と通し着せます。
17.患者の襟元や寝間着の前を観察して整えます。そして、背中の寝間着のしわをとります。	17.患者の襟元が キューキュー ではないか、 くしゃくしゃ でないか、また、寝間着の前が くしゃくしゃ な状態になっていないか観察して整えます。そして、背中の寝間着が しわしわ にならないように、しわをとります。
18.新しい寝間着は、先に寝間着の右側が患者の体の前にくるようにしてから、次に寝間着の左側を合わせて襟元を整え着せます。襟元を合わせます。ひもは患者が苦しくないようによ結びにします。	18.新しい寝間着は、先に寝間着の右側が患者の体の前にくるようにしてから、次に寝間着の左側を合わせて襟元を整え着せます。襟元が キューキュー にならないように、 キチン と合わせます。ひもは患者が苦しくないよう ふんわり とよ結びにします。
19.患者に、寝間着の着せ方について着心地を確認します。	19.患者に、寝間着の着せ方は ぐじゃぐじゃ ではないか、 ごわごわ しているところはないかなどを確認します。
20.終了後は、音をたてないようにベッド柵をつけ、ベッドを下げ、オーバーテーブルや床頭台をもとに位置に戻します。	20.終了後は、 ゴツン と音をたてないようにベッド柵をつけ、ベッドを スーツ と下げ、オーバーテーブルや床頭台をもとに位置に戻します。
21.ナースコールは、患者がとれるようなところに置きます。	21.ナースコールは、患者が ざつ ととれるようなところに置きます。

表2 寝衣交換技術の修得度と実験群の指導言語

実験群の指導言語	評価項目	対照群	実験群	有意確率
1.声掛けは、 おどおど とした態度ではなく、患者に信頼されるように話します。口の中で ごによごによ とか、 こそこそ するのではなく、わかり易いことばで説明します。	1.援助の目的や方法をわかり易い言葉で説明し同意を得て実施した。	2.47	2.56	0.534
2.自分の動きが ヨタヨタ したり チョコチョコ したりしないように、身長や、前腕、上腕の長さ(最大作業域、正常作業域)を考慮してベッドのフレームに自分の膝関節が付く程度にベッドを上げます。	2.自分の膝関節がベッドのフレームにつく程度にベッドを挙げた。	4.00	4.00	1.000
3.自分の体が ズツ と動き、すんなりと新しい寝衣がとれるように寝間着を準備します。	3.作業域を考慮して、床頭台、オーバーテーブル、椅子を移動させ新しい寝衣をとりやすい場所に準備した。	3.58	3.78	0.137
4.自分から遠い方の患者の襟元に手をを入れて、 チョツドリ 広げてから、自分に近い方の襟元を患者の肩より ズルリ と下げます。そして、患者の肘と前腕を自分の手のひらに ソツ とのせて、寝間着の袖口を ズツ と通し脱がせます。	4.遠位側の襟元を少し広げ手前側の寝衣の襟元を患者の肩より下げ、上肢を下から支えるようにして、寝衣を引っ張らないで、無理なく丁寧に脱がした。	2.78	3.53	0.000 ***
5.次は、新しい寝間着を着せる動作です。自分に近い患者の手首や前腕を自分の手のひらに ソツ とのせて、新しい寝間着の袖口から ズツ と入れて、新しい寝間着を着せます。	5.手前側の手を迎え入れ、手関節や上肢を下から支えるようにして手前側にある新しい寝衣を無理なく丁寧に着せた。	2.81	3.82	0.000 ***
6.横になった時に上になる腕が上にくるように、患者の胸の上で患者の腕を しつかり と交差させます。	6.患者の腕を掴まないで、上になる腕を上にして胸の上で丁寧に組ませた。	3.06	3.09	0.872
7.次は、患者の両膝を立てる動作です。自分の右足を前に出し、肩幅に開き、ベッドに対して対角線上に立ちます。患者の両方の膝の上に自分の親指を当てて、残りの指を膝の裏側に置くように患者の膝を ソツ とつかみます。そして、そのまま、自分の体重を前足にかけ、患者の両足が ポン と軽く上がるように、自分の体重を後ろ足にかけます。	7.患者の両膝の上に自分の親指を当て、残りの指を膝の裏側に置くように患者の膝をつかみ、重心移動を利用して、患者の両足が軽くあがるようにして、両膝を高く立たせました。	2.69	3.53	0.000 ***
8.次は、患者を横に向ける動作です。患者の両膝に自分の手のひらを置き サツ と向こう側に倒します。両膝が倒れると、患者の上半身が上がってきますので、 モサモサ しないで、上がってくる患者の上半身の肩を支え、 ゆっく りと向こう側に倒します。	8.先に患者の両膝を向こう側に倒し、時間差で上がってくる患者の上半身の肩を支えて、転落防止に配慮しながら患者を側臥位にした。	3.31	3.78	0.001 ***
9.横向きになった患者の背中を支えて、新しい寝間着を、両手で サツ と広げます。	9.横向きになった患者の背部で新しい寝衣を広げる時は、手際よく広げることができた。	3.25	3.69	0.002 **
10.次は古い寝間着を取り除く動作です。古い寝間着には汚れがあるから、その汚れがシーツの上に落ちたりしないよう ぶさぶさ と内側に丸めます。	10.古い寝衣の汚れが拡がらないようにすばやく内側に丸めた。	2.89	3.58	0.000 ***
11.内側に丸めた古い方の寝間着を横になっている患者の下に ソツ と入れます。入れる時には、丸めた寝間着を クシヤクシヤ にしないように丁寧に入れます。	11.内側に丸めた古い寝衣を側臥位になっている患者の下に押し込むのではなく丁寧に入れ込んだ。	3.06	3.73	0.000 ***
12.新しい寝間着の中心を患者の背骨に ソツ と沿わせて、背中で しわくしわ になっている寝間着を ピン と伸ばします。	12.新しい寝衣の背縫いを背柱に沿わせて、背部の寝衣のしわを伸ばした。	2.89	3.76	0.000 ***
13.新しい寝間着を扇子のように折るか丸めて、横になっている患者の下に ソツ と入れます。入れる時には、丸めた寝間着を クシヤクシヤ にしないように丁寧に入れます。 ぎゅっぎゅっ と入れてはいけません。	13.新しい寝衣を扇子折か丸めて、側臥位になっている患者の下に押し込むのではなく丁寧に入れ込んだ。	2.97	3.78	0.000 ***
14.古い寝間着には汚れがあるから、その汚れがシーツの上に落ちたりしないよう ぶさぶさ と内側に丸めて、 サツ と取り除きます。	14.患者を看護師側に半側臥位にし、患者の身体の一部に触れながら安定させて、古い寝衣の汚れが拡がらないように丸めながら取り除いた。	2.5	3.49	0.000 ***
15.患者の下に入れてある新しい寝間着を ズツ と引き出します。 ぎゅっぎゅっ と引っ張らないように取り出します。	15.患者の下に入れ込んだ新しい寝衣を引っ張らず無理なく引き出した。	3.22	3.80	0.000 ***
16.新しい寝間着の袖口に自分の手をを入れて、患者の肘と前腕を自分の手のひらで下から ふんわり と支えて、寝間着の袖口を ズツ と通し着せます。	16.迎え袖で、手関節を下から支えるか握手をして反対側にある新しい寝衣を無理なく丁寧に着せた。	2.72	3.53	0.000 ***
17.患者の襟元が キューキュー ではないか、 くしゃくしゃ でないか、また、寝間着の前が くしゃくしゃ な状態になっていないか観察して整えます。そして、背中の寝間着が しわしわ にならないように、しわをとります。	17.襟元は窮屈でなく、前身ごろや袖は整えられ、背部のしわを丁寧にとった。	2.97	3.33	0.047 *
18.新しい寝間着は、先に寝間着の右側が患者の体の前にくるようにしてから、次に寝間着の左側を合わせて襟元を整えます。襟元が キューキュー にならないように、 キチン と合わせます。ひもは患者が苦しくないように ふんわり とよこ結びにします。	18.寝衣が右前合わせになっており、ひもは患者が苦しくないように横結びになっていた。	3.42	3.62	0.239
19.患者に、寝間着の着せ方は ぐじやぐじや ではないか、 こわこわ しているところはないかなどを確認します。	19.患者に着心地を確認していた。	3.50	3.13	0.119
20.終了後は、 ゴツン と音をたてないようにベッド柵をつけ、ベッドを ズツ と下げ、オーバーテーブルや床頭台をもとに位置に戻します。	20.終了後、音をたてずにベッド柵をつけ、静かにベッドを下げ、環境を整えていた。	3.11	3.38	0.183
21.ナースコールは、患者が ぶさぶさ ととれるようなところに置きます。	21.ナースコールを手の届くところに置いていた	3.08	3.07	0.953
	22.実施中、患者の状態を確認する声掛けをわかり易い言葉で行っていた。	3.00	3.00	1.000
	23.全体をとおし、動作が無駄がなくスムーズにできていた。	2.94	3.27	0.070
	24.全体をとおし、最大作業域の範囲で作業することができていた。	3.17	3.64	0.000 ***
	25.全体をとおし、安全に配慮し実施していた。	3.14	3.22	0.587
	合計	76.5	87.1	0.000 ***

p<0.05*, p<0.01**, p<0.001***

を無理なく丁寧に着せた。(対照群: 2.81, 実験群: 3.82)」項目であり、指導言語として対照群には「5. . . . 自分の手のひらにのせて、新しい寝間着の袖口から入れて、新しい寝間着を着せます。」と説明したが、実験群には「5. . . . 自分の手のひらにソツとのせて、新しい寝間着の袖口からスツと入れて、新しい寝間着を着せます。」と説明した実験群の方が評価の得点は高かった。

次いで、得点差が高かった項目は「14. . . . 古い寝衣の汚れが拡がらないように丸めながら取り除いた。(対照群: 2.50, 実験群: 3.49)」であり、指導言語として対照群には「14. . . . その汚れがシーツの上に落ちたりしないよう内側に丸めて、取り除きます。」と説明したが、「14. . . . その汚れがシーツの上に落ちたりしないようサツサツと内側に丸めて、サツと取り除きます。」と説明した実験群の方が評価の得点は高かった。

次いで得点差が高かった項目は、「12. . . . 背柱に沿わせて、背部の寝衣のしわを伸ばした。(対照群: 2.89, 実験群: 3.76)」であり、指導言語として対照群には「12. . . . 患者の背骨に沿わせて寝間着を伸ばします。」と説明したが、「12. . . . 患者の背骨にソツと沿わせて、背中をしわくちゅになっている寝間着をピーンと伸ばします。」という指導言語を用いた実験群の方が評価の得点は高かった。

次に「13. . . . 患者の下に押し込むのではなく丁寧に入れ込んだ。(対照群: 2.97, 実験群: 3.78)」項目では、指導言語として対照群には「13. . . . 横になっている患者の下に入れます。入れる時には、丸めた寝間着を丁寧に入れます。」と説明したが、「13. . . . 横になっている患者の下にソツと入れます。入れる時には、丸めた寝間着をグジャグジャにしないように丁寧に入れます。ぎゅっぎゅっを入れてはいけません。」と説明した実験群の方が評価の得点は高かった。

「7. . . . 患者の両足が軽く上がるようにして、両膝を高く立てた。(対照群: 2.69, 実験群: 3.53)」項目では、指導言語として対照群には「7. . . . 患者の膝をつかみます. . . . 患者の両足が軽く上がるように、自分の体重を後ろ足にかけます。」と説明したが、「7. . . . 患者の膝をソツとつかみます. . . . 患者の両足がボンと軽く上

がるように、自分の体重を後ろ足にかけます。」と説明した実験群の方が評価は高かった。

「16. . . . 手関節を下から支えるか握手をして反対側にある新しい寝衣を無理なく丁寧に着せた。(対照群: 2.72, 実験群: 3.53)」項目では、指導言語として対照群には「16. . . . 患者の肘と前腕を自分の手のひらで下から支えて、寝間着の袖口を通し着せます。」と説明したが、「16. . . . 自分の手のひらで下からふんわりと支えて、寝間着の袖口をスツと通し着せます。」と説明した実験群の方が評価の得点は高かった。

6. 考 察

本研究は、寝衣交換技術の修得を高めるために、教員の演示時の視覚的情報を補完する指導言語にオノマトペを用いてその効果を明らかにすることを目的に実施した。その結果、寝衣交換技術の演示時には、指導言語にオノマトペを用いた方が、寝衣交換技術の修得は高いことが示された。

今回、実験群の寝衣交換技術の評価得点が高かった動作に使用したオノマトペをみると、「スツ」「サツサツ」「サツ」「スツ」「ソツ」という一連の流れを示したり速さの程度を表現するオノマトペや、「ソツ」「ピーン」「しわくちゅ」「グジャグジャ」「ぎゅっぎゅっ」「ふんわり」という動作の様子をイメージするオノマトペである。

自分の手のひらを、新しい寝間着の袖口から入れて寝間着を着せる動作については、「スツ」というオノマトペを用いて動作の説明をすることで、寝間着の着せ方を学生にイメージさせることができた。その結果、学生は無理なく丁寧に着せることができ、技術の評価得点が高くなったと考える。

汚れがシーツの上に落ちたりしないよう内側に丸めて、取り除くという動作については、「サツサツ」と「サツ」というオノマトペを使用したことで、シーツの丸め方や取り除き方をイメージすることができ、学生の動作の手際がよくなり、技術の評価得点が高くなったと考える。

患者の背骨に沿わせて寝間着を伸ばす動作については、「しわくちゅ」や「ピーン」というオノマトペを使用し

たことで、学生は寝間着はしわくちやのままではなく、ピーンと伸ばさなくてはいけないという寝間着の伸ばし方の様子をイメージすることができ、安楽で美しい動作となり、技術の評価点が高くなったと考える。

患者の肘と前腕を自分の手のひらで下から支えて、寝間着の袖口を通す動作については、「ふんわり」というオノマトペを使用したことで、手関節を下から支える支え方を掴むのではなく、やわらかく支える動作であることがイメージでき、学生の動作が無理なく丁寧な動作となり、技術の評価点が高くなったと考える。またオノマトペには、指導内容を忘れずに覚えていられることや、オノマトペを使用した説明は興味がわき印象深く記憶に残り易い¹⁷⁾という長所がみられるが、このことも、オノマトペを使用した実験群の寝衣交換技術の得点が高くなったことに影響したと考える。

オノマトペは、微妙な動作感覚、動作リズム、動作タイミングを直観的に表現できたり¹⁸⁾、動きの言語化を図るのに有効である¹⁹⁾ことが報告されている。今回の寝衣交換技術の演示時においても、動作リズムや動作のタイミングという動き方のコツをオノマトペを用いることで学生は修得できたといえる。また、「ふんわり」「ピーン」などの動作の様子を表すオノマトペを用いたことで、どのように実施すればよいのか動作の様子をイメージすることができたと考える。

専門職である看護師が提供する看護技術は、安全・安楽を考慮した手際が良い丁寧な技術でなければ看護のプロとしての技術とは言えない。「ふんわり」「ピーン」「ソッ」「スーッ」などのオノマトペを用いたことで、学生の動作が、手際よさや丁寧な動作となり、安全・安楽を考慮した看護専門職に相応しい技術の修得につながったと考える。

このように、オノマトペは、感覚的な印象を表し、複雑な内容や微妙なニュアンスも自由に表現でき、動作表現の機能があることより、演示時の視覚的情報を補完する説明にオノマトペを取り入れた指導言語を使用することで、学生はこれから行う動作のイメージを鮮明に描くことができる。

演示指導している教員は、学生は教員の動作を見てい

るのであるから、「ここ」や「それ」、「このように」などの指示詞や代名詞を用いて看護技術の動作を説明することで理解できると考えている傾向であるが²⁰⁾、オノマトペを用いた指導言語を使用することで、表現が困難な動作内容を補完あるいは置換して、視覚的情報を補完し学習者にイメージを伝えることができ、より効果的な演示指導に改善できると考える。

7. 研究の限界と課題

本研究結果は、一大学の一年生を対象にしたものであり、一般化するには限界がある。さらに異なる学年に対しても調査を行い、寝衣交換技術の演示時に使用するオノマトペを用いた指導言語のモデルづくりに努める必要があると考える。そして、看護技術の効果的な指導方法を検討するために、他の看護技術において活用されているオノマトペをまとめ、ナーシングスキルオノマトペ辞典を作成していくことが今後の課題である。

8. まとめ

寝衣交換技術の修得を高めるために、教員の演示時の指導言語にオノマトペを用いた有効性を明らかにすることを目的に、準実験研究を行った。その結果、次のことが明らかになった。

- 1) 寝衣交換技術の演示時の指導言語にオノマトペを使用した群の方が、寝衣交換技術の修得度は高かった。
- 2) 寝衣交換技術の評価得点が高かった動作に使用したオノマトペは、「スーッ」「サッサッ」「サッ」「スッ」「ソッ」という一連の流れや速さの程度を表現するオノマトペや、「ソッ」「ピーン」「しわくちや」「グジャグジャ」「ぎゅっぎゅっ」「ふんわり」という動作の様子をイメージするオノマトペであった。

これらのことより、演示時の視覚的情報を補完する説明には、オノマトペを用いた指導言語の教示は有効であることが示唆された。

謝 辞

今回の研究にご協力頂きました学生の皆様に感謝申し上げます。

本研究は、科研研究費助成事業の助成を受け実施した研究(基盤研究C 課題番号 26463242: 代表 大津廣子)の一部であり、日本看護研究学会第43回学術集会上に発表した。

引用文献・参考文献

- 1) 大津廣子, 佐藤美紀, 滝内隆子, 他: 学内実習における教員の基礎看護技術の実施状況と指導方法, 愛知県立大学看護学部紀要, **19**, 31-40, 2013.
- 2) 大津廣子, 佐藤美紀, 滝内隆子, 他: 看護教員の看護技術の「教え方」に対する意識, 日本看護学教育学会誌, **22**, 302, 2012.
- 3) 生田久美子: 「わざ」から知る, 東京大学出版会, 9-18, 2007.
- 4) 山崎朱音, 村田芳子, 朴 京眞: 創作ダンスの指導における指導言語の意味と動きにみる観点—教材「新聞紙を使った表現」を対象に—, 体育学研究, **59**, 203-226, 2014.
- 5) 下釜綾子: 身体表現活動におけるオノマトペを用いた動きとイメージ, 長崎女子短期大学紀要, **37**, 78-83, 2013.
- 6) 藤野良孝, 井上康生, 吉川政夫, 他: スポーツオノマトペの実態について, 東海大学スポーツ医科学雑誌, **17**, 28-38, 2005.
- 7) 吉川政夫: 運動のコツを伝えるスポーツオノマトペ, バイオメカニズム学会誌, **37**, 215-220, 2013.
- 8) 三島康紀: 鉄棒運動における「動きの言語化」を引き出す指導法のあり方, 島根大学大学院教育学研究科 課題研究成果論集, **5**, 41-50, 2014.
- 9) 田村 進, 石谷桂子, 川西正行, 他: 運動指導におけるオノマトペの効果に関する研究—跳び箱運動の開脚飛びの場合—広島文教教育, **21**, 1-9, 2006.
- 10) 藤野良孝: ステップ運動で表現されるスポーツオノマトペの一考察, 情報学研究, **26**, 41-45, 2017.
- 11) 藤野良孝: オノマトペの掛け声が料理の動作に与える影響, 情報学研究, **26**, 47-52, 2017.
- 12) 石館美弥子, 矢田部かなか, 山下麻実, 他: 医療場面において幼児にかかわる看護師が用いるオノマトペの検討, 小児保健研究, **73**, 453-461, 2014.
- 13) 石館美弥子, 山下麻実, いたうたけひこ: 小児医療場面において看護師が幼児のコミュニケーションに用いるオノマトペの特徴, 小児保健研究, **74**, 914-921, 2015.
- 14) 植田栄子: 診療コミュニケーションにおける擬音語・擬態語の使用傾向と効果的運用について, 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌, **6**, 53-67, 2015.
- 15) 中村美起, 大津廣子, 中井三智子 他: 教員が看護技術の演示で用いている指導言語の特徴, 鈴鹿医療科学大学紀要, **24**, 125-133, 2017.
- 16) 小野正弘編: 日本語オノマトペ辞典, 小学館, 2011.
- 17) 吉川政夫: 運動のコツを伝えるスポーツオノマトペ, バイオメカニズム学会誌, **37**, 215-220, 2013.
- 18) 藤野良孝: スポーツオノマトペ なぜ一流選手は「声」を出すのか, 小学館, 2008.
- 19) 三島康紀: 鉄棒運動における「動きの言語化」を引き出す指導法のあり方, 島根大学大学院教育学研究科演題研究成果論集, **5**, 41-50, 2014.
- 20) 前掲 15)

Effect of Onomatopoeia Used in Instructive Language When Demonstrating the Skill of Changing a Sleepwear

Hiroko OTSU, Miki NAKAMURA, Akiko HAYASHI,
Hiroko MITSUI, Michiko NAKAI

Faculty of Nursing,
Suzuka University of Medical Science

Key words: sleepwear change skill, demonstration, instructive language, onomatopoeia

Abstract

PURPOSE : To reveal the effectiveness of onomatopoeia used in the instructive language when the teacher demonstrates the skill of changing a sleepwear, in order to raise the level of skill acquisition by students.

METHODS : The 30 students, who had agreed to take part in the research, were divided into two groups; in one group, onomatopoeia was used in the language during the demonstration (experimental group), while in the other group onomatopoeia was not used (control group). A skill check for changing a sleepwear was performed before the experiment. It was confirmed that there was no significant difference in the level of skill between the two groups. Then the teacher demonstrated the skill of changing a sleepwear to each of the two groups. Each group was separately given 15 minutes to practice the skill for two weeks, and then students' skill of changing a sleepwear was checked.

RESULT : The total score of the post-check was 87.1 for the experimental group, while for the control group it was 76.5. It was revealed that there was a significant difference ($p<0.01$) between the two. In total there were 25 items in the check sheet. Out of these 25, the experimental group whose instructive language included onomatopoeia showed significantly higher level of acquisition ($P<0.01$, $p<0.05$) in 14 items such as "remove a sleepwear easily and carefully" and "put on a new sleepwear easily and carefully."

DISCUSSION : Onomatopoeia can give sensory impression and it can freely express complicated things and delicate nuances. Due to its function that makes it possible to describe action without words, instructive language such as "support the wrist joint FUNWARI from under" is better than the simple "support the wrist joint from under," because the former expression is more closely associated with the soft image of action of supporting (FUNWARI is an onomatopoeic word in Japanese language that indicates the status of being soft, gentle and careful). It is assumed that the students were able to acquire the skill so that they can do the job more carefully.

略 歴

大津 廣子 (博士 [経済学]) 鈴鹿医療科学大学 看護学部看護学科 教授

学 歴 :

- 平成4年 名古屋市立大学大学院 経済学研究科 修士課程 修了
- 19年 名古屋市立大学大学院 経済学研究科 博士後期課程単位取得後退学

職 歴 :

- 平成13年 岐阜大学 医学部 看護学科 教授
- 19年 愛知県立看護大学 看護学部 教授
- 27年 現職

主な研究内容 :

- ・看護技術教育力の育成・向上プログラムの開発
- ・看護技術演示力と指導言語の連関

社会的活動 :

- ・日本看護技術学会評議員
- ・日本看護科学学会社員